

[書 評]

Amos Bertolacci

*The Reception of Aristotle's Metaphysics in Avicenna's Kitāb al-Šifā':  
A Milestone of Western Metaphysical Thought*

Islamic Philosophy, Theology, and Science, v. 63

Brill, 2006, pp. xvii + 675

ISSN: 0169-8729, ISBN: 978-90-04-14899-4, 159 × 51 × 241mm, \$336.00

---

小 林 剛

アリストテレス『形而上学』は歴史上、古代中世の注釈家たちによって様々な解釈されつつ受容され、デカルトに始まる近代哲学者たちによって破棄された。著者によればアヴィセンナはこのような、アリストテレス『形而上学』の解釈を改変していく段階から、自己主張することによってそれを破棄する段階への転換点に立つ哲学者である。つまりアヴィセンナは、ペリパトス派にとどまりながら、形而上学がそれ自体で発展することを可能にした最初の哲学者だったのである。このような観点から著者は、アヴィセンナの最も重要な形而上学著作『治癒の書』「神的事柄の学」における彼のアリストテレス『形而上学』解釈を検討する。

著者によれば、アリストテレス『形而上学』の主な問題点は次の2点である。一つは形式、つまり学問的枠組みの問題である。それはたとえば、形而上学は何を対象とするのか、形而上学はどのような構造をしているのか、形而上学はどのような方法に従っているのか、形而上学は他の学とどう関係するのか、といった問題である。もう一つは内容、つまり様々な学説の問題である。それはたとえば実体の問題などである。

アヴィセンナは、まず形式の問題を、アリストテレス『分析論後書』における学問の基準に従って『形而上学』を再構成することによって解決する。すなわち①形而上学は「存在者としての存在者」という主題を有する。②形而上学は、「存在者としての存在者」の様々な種、特質、原理によって正確な構造を与えられる。③形而上学は厳密な方法、すなわち、弁証的ではなく論証的で分析的な方法を有する。④形而上学は諸学の体系の中で卓越した位置にあり、他のすべての学に基礎を与える。

またアヴィセンナは『形而上学』の内容を、実体と付帯性、一と多、普遍、原因、哲学的神学といった、いくつかの中心的学説によって再組織化し、それらを厳密な方法によって改訂し、これら別々のテーマを結び付けるアヴィセンナ独自のいくつかの理論（特に存在と本質の区別）と結び付けた。さらにアヴィセンナは哲学的神学において、アリストテレス『形而上学』の見方を、ギリシア世界の『形而上学』注解や、アリストテレスに帰せられた新プラトン主義著作や、イスラーム神学の見方と統合した。

アリストテレス『形而上学』とアヴィセンナ『治癒の書』『神的事柄の学』との関係はこれまで当然のこととして前提されるだけで、何かがどう関係しているのかということについて学問的に適切に考察されて来なかった。著者は本書で、アヴィセンナ『治癒の書』『神的事柄の学』におけるアリストテレス『形而上学』の使用について、できるかぎり完全な仕方の説明をすることを目指すとしている。

第1部「アヴィセンナ以前のアラビア世界における『形而上学』の受容」では予備的な考察がなされる。

第1章『『形而上学』アラビア語訳：アヴィセンナによって提供された証拠に基づく新評価』では『形而上学』アラビア語訳が取り上げられている。著者によれば『治癒の書』『神的事柄の学』は、『形而上学』アラビア語訳が誰によって何巻が訳されたか、それらのどれがどれほど流布したかなどについて様々な情報を与えてくれる。

第2章「キンディとファーラービーを越えて：アラビア世界における『形而上学』受容史上のアヴィセンナの位置」では、先行する二人の『形而上学』解釈者キンディとファーラービーのアヴィセンナに対する影響が考察される。著者によれば、『形而上学』の $\alpha$ 巻と $\Lambda$ 巻を直接結び付け、形而上学を本質的に神学と捉える考え方は、キンディに始まるアラビア哲学の歴史のみならず、アヴィセンナにおいても根本的であった。ただしアヴィセンナは後にファーラービーから、『形而上学』は哲学的神学にとどまらないことを学ぶことになる。

第3章「アンモニオスとアヴィセンナの間：ファーラービー『アリストテレス「形而上学」の目標について』」では、アヴィセンナの『形而上学』理解に決定的な影響を与えたファーラービーの論考に焦点が当てられる。著者によればファーラービーはアヴィセンナが『形而上学』全体のバランスに気付くのを助けた。ファーラービーは、射程が哲学的神学にとどまっていたアレクサンドロスやテミスティオスの『形而上学』 $\Lambda$ 巻注解だけでなく、『形而上学』のより幅広い入門書の概観を含んでいたアンモニオスの著作をも参照していたのである。

第2部「アヴィセンナによる『形而上学』の学問的枠組み」では、『形而上学』の形式に関してアヴィセンナが『治癒の書』『神的事柄の学』でどう取り組んでいるかが記述される。

第4章『『形而上学』』の主題に関するアヴィセンナの発想：形而上学の主題としての「存在者としての存在者」、目標としての第一原因、神」では『形而上学』の主題が取り上げられる。著者によれば、形而上学が第一諸原因や神の研究であるのは、それらが形而上学の目標だからであり、存在者の研究であるのは、存在者としての存在者が形而上学の主題だからであり、運動しない非質料的諸事物の研究であるのは、第一諸原因や神や、存在者としての存在者がそのようなものだからである。このように、『治癒の書』「神的事柄の学」におけるアヴィセンナの立場は、形而上学の主題に関して、分かりにくく一貫していないように見えるアリストテレスの見解を、初めて一貫した仕方では体系的に説明したものである。

第5章『『形而上学』』の構造のアヴィセンナによる改訂：存在者の種、特質、原理を扱う学としての形而上学』では『形而上学』の構造が取り上げられる。著者によれば、形而上学の主軸は存在論である。存在論は3つの部分に基づく。すなわち、主題に関する存在論、特質に関する存在論、原因に関する存在論（哲学的神学）である。その一方で、補助的な軸として一論がある。一論も一と多およびそれらの特質に関わる。一と多の原因に関しては、原因に関する存在論における神の一性の考察が代表していると見ることができる。これらの中では原因に関する存在論が最も重要である。

第6章『『形而上学』』の方法のアヴィセンナによる精密化：論証的、分析的、非弁証的学としての形而上学』では『形而上学』の方法が取り上げられる。『治癒の書』「神的事柄の学」は『形而上学』に比べてより論証的、分析的であり、それほど弁証的でない。アヴィセンナは『形而上学』の内容を三段論法に直したりしている。

第7章『『形而上学』』とアリストテレス集成の他の部分との関係に関するアヴィセンナの見解：基礎付ける学としての形而上学』では『形而上学』と他の諸学との関係が取り上げられている。著者によればアヴィセンナの考える形而上学は、他の諸学の原理を確かなものとする。ここでの原理とは、すべての学に共通する論理法則や、すべての学が議論なしに用いる普遍概念だけでなく、各々の学に固有で、それらに固有の主題に関わる原理も含まれる。

第3部「アヴィセンナによる『形而上学』の内容」では、『治癒の書』「神的事柄の学」における『形而上学』諸巻の様々な使われ方に焦点が当てられる。第8章『『治癒の書』「神的事柄の学」における『形而上学』の引用』では、『治癒の書』「神的事柄の学」における『形而上学』のすべての引用リストが示される。第9章「学としての形而上学に関するアヴィセンナの発想の主たる源泉：Γ巻とその引用』では『形而上学』Γ巻が、第10章「弁証法に対するアヴィセンナの態度：B巻とその引用』では『形而上学』B巻が取り上げられる。第11章『『治癒の書』「神的事柄の学」のその他の源泉』では『治癒の書』「神的事柄の学」に

おけるアリストテレス以外の源泉が考察される。

著者によればアヴィセンナは『形而上学』を、恐らく K 巻以外のすべての巻を様々な仕方で引用している。しかしそれは、『形而上学』のもともとの順序とは相当異なる順序に従ってである。アヴィセンナは『治癒の書』『神的事柄の学』の中で、『形而上学』各巻を3つのグループに分けて『形而上学』の内容を改訂する。すなわち、Γ 巻と E 巻 1 章は学問論のための準備を提供する。Z, H, Θ, I 巻は存在論と一論の中心部分をなす。B 巻は難問、反論に対処するために用いられる。Δ 巻は意味論的に準備となる区別の源泉である。A, M, N 巻は学説史に関する付論を提供する。α 巻 2 章と Λ 巻 6 章から 10 章は、結論、目標となる哲学的神学の枠組みを構成する。神の取り扱い、『形而上学』では極めて短い、『治癒の書』『神的事柄の学』では 8 巻から 10 巻 3 章までとはるかに長い。

著者によれば、ファーラービーが第二の師（アリストテレス）と呼ばれるのがふさわしいのと同様に、アヴィセンナは、『形而上学』を非常に深い仕方で改訂したがゆえに、「第二の（ロドスの）アンドロニコス」と呼ばれるのにふさわしい。『治癒の書』『神的事柄の学』を『形而上学』の第二「版」、西洋の形而上学的思索の第二の「始まり」と見なすことは信じがたいことではない。

本書はアヴィセンナに関する純粋に思想的な研究としてよりも、むしろ、彼の思想と深く関連した文献学的研究として高い価値を有するようになる。